

「底が突き抜けた」時代の歩き方 405

いまの日本では絶対に作れなかった映画『ラスト サムライ』

トム・クルーズと共に主演した渡辺謙がアカデミー賞助演男優賞にノミネートされて、話題を呼んでいる映画『ラスト サムライ』は平易で簡潔な作品である。難解さはどこにもみられない。しかし、観終わってから、特に日本人にとってこれほど複雑な思いにさせられる映画もない。もちろん、その複雑さは映画のなかからやってくるのだが、映画を受けとめるいまの日本の現実、イラクへの自衛隊派兵という戦後日本にとっての最大の問題に直面している日本の現実が、より一層複雑さを増幅させているのである。たとえば、映画パンフを開いた最初の頁の折り込みを紐解くと、そこには「武士道～武士の流儀～」と題して、文言が刻み込まれている。「礼」の項はこんな文字が続く。

《サムライたる者、非道な行いを禁ず。

そのような強さを誇示する必要がないのがサムライなり。

またサムライたる者、敵に対しても礼を欠かざるべし。

人に対する敬意なくしては、人間も動物と同類。

サムライは、闘いにおいて己の強さだけでなく、他に対する行いによっても敬意を払われるべし。

窮地にこそ、真のサムライの内なる強さが見える。》

また、「名誉」には次の言葉が起立している。

《サムライたる者、名誉に重きを置き、それをもって己の価値とすべし。

自らが下した決断と、それらがいかに成し遂げられたかが、己の真の姿を映す。

己自身から決して逃げ隠れすることはできない。》

殊更、「サムライ」と規定する必要もないほどに、人間の歩むべき根本が説かれていると思われるが、これらのことがいまの日本、いまの世界のなかでどれほど困難なことであるか、というより、どれほどの内省をもって心掛けられていることであるか、と思いを巡らすと、単調な波紋がさざめき立って複雑な感慨を心のなかに拡げていくのをどうすることもできないのだ。やはり複雑さは日本人としての私を源泉としているといわねばならない。

映画のストーリーは、映画パンフにはこう記されている。

《明治天皇が即位し、近代日本が誕生した1870年代。政府軍に西洋式の戦術を教えるために、南北戦争の英雄ネイサン・オールグレン大尉が来日する。かつては名誉と国のために命を懸けた男。しかし南北戦争以降の数年間で、彼と彼を取り巻く世界は一変していた。“ 実用主義 ” が “ 勇気 ” に、“ 利己主義 ” が “ 犠牲 ” に取って代わり、名誉などどこにも見あたらない。とりわけインディアン討伐戦で果たした彼の役割が、失望と

悔いにと終わった西部には…。祖国アメリカでのオールグレン大尉は、魂を失ったさまよえる男であった。

また日本の地でもひとり、自分の生き方“武士道”が崩壊しかけていると感じていた戦士がいた。名は勝元盛次。サムライの最後の長として崇拝されている。アメリカ先住民を追い詰め追いやり、アメリカの西部を侵略したのとまるで同じように、近代は伝統的な日本をも飲み込んでいた。発展をもたらした電線と鉄道は、今やサムライが何世紀にもわたって生き死にの拠り所としてきた価値観や規範を脅かすようになった。しかし勝元は、戦わずして去るつもりなどなかった。

日本の若き天皇が、発展する日本市場が欲しくてたまらないアメリカ実業界の面々の懇願に応えてオールグレンを雇ったときに、ふたりの戦士の行く手がひとつに重なる。より西洋化され交易に都合の良い政府を作ろうと、天皇のご意見番たちがサムライの根絶を企てる中、対立する立場の二者は運命の出会いを果たすのだ。死をも超えるゆるぎない“武士道”精神に感銘を受けるオールグレン、やがて固い絆で結ばれてゆく西洋と東洋のサムライ。しかしふたりの友情もつかの間、“サムライ魂”を貫くために滅んでゆく運命を選ぶしかないサムライたちの、最後の闘いが始まった。異国の地で自分と同じ魂を見出したオールグレンは、信念にあえて殉じようとする彼らと、共に命を懸けて戦うことを決意する…。》

このストーリーを抜き書きしながら、オールグレン（トム・クルーズ）と勝元（渡辺謙）の、《やがて固い絆で結ばれてゆく西洋と東洋のサムライ》という記述に手が止まった。我々日本人からみれば、「ラスト サムライ」を体現している人物は勝元であったが、制作意図からすれば、オールグレンもまた「ラスト サムライ」であったということになる。そうだとすれば、映画は日本の「ラスト サムライ」を描きながら、同時にアメリカ（西洋）の「ラスト サムライ」をも描いていたのかもしれない。渡日する前のオールグレンのアメリカでの冒頭の描写が短く、導入部としての意味合いしか帯びていないように感じられたので、オールグレンに対しての南北戦争やインディアン討伐がもつ意味をあまり深く考えなかったが、彼もまた「ラスト サムライ」であったとなると、たとえ描写されてはいなかったとしても、南北戦争やインディアン討伐についても看過することができなくなる。

この観点から切り込んでみせるのは、『キネマ旬報』（03年12月下旬号）の明治大学教授越智道雄である。《最初のシナリオでは、トム・クルーズ扮する北軍将校は、南軍のギャトリング・ガンに突撃、部下の大半を失った衝撃から、騎士道の名譽を喪失、明治政府のお雇外人になる。ところができあがった映画では、この騎兵将校はインディアン虐殺による軍人としての名譽喪失から日本へ流れ、お雇外人の立場を放擲して、反乱土族に味方する形に変わっている。同じ反乱有色人種への贖罪を、太平洋を隔てて果たすことで、騎士道を回復するのである。》と述べて、ギャトリング・ガンについて説明する。《南部人リチャード・J・ギャトリングがこの初期の機関銃を発明したのは、南

北戦争中だった。「一丁千五百ドルのこの機関銃で維持費が5万ドルかかる一個連隊分の兵力に匹敵する」と言われたから、当時の「核兵器」だった。ところが、この機関銃による「屠殺」は戦争の美学をも粉碎するとして、軍関係者には前記の明治政府軍隊長のような拒絶反応を示す者が続出した（ジョン・エリス『機関銃の社会史』…）。

《前記の明治政府軍隊長のような拒絶反応》とは、勝元たち反乱土族とオールグレンが、《明治政府軍のギャトリング・ガンに刀槍だけで突撃、玉砕する》クライマックスのシーンで、《政府軍の隊長がギャトリング・ガンの発射を制止、自らが倒した騎馬武者らに土下座して詫び、部下の将兵もそれに倣う光景》を指しており、《戦争が武士道や騎士道の華とされた時代の終焉を、この光景は如実に表していた。申し訳ありません、しかし今後はわれわれをギャトリング・ガンを始めとする近代兵器を駆使して戦う近代戦に邁進させて下さい - 土下座する将校はそう詫びていたのだ。》と読み取る。オールグレンが反乱土族に加担することによって果たす役割についても、こう説明される。

《この将校は、形の上では同国人ペリーの日本開国に背いて日本を再び鎖国に追いやる。反乱土族の拠点は、武士道の「柔」の部分を体現する桜の名所、吉野で（実際にはこの地方に土族反乱はなかった）、そこへの鉄道敷設に対して武士たちは反乱を起こしたのだから、これこそ「鎖国」への固執である。

また映画では、米軍将校が反乱土族の大將が切腹して果てた刀を明治新帝に献上する形で、武士道が侍という肉体から離れて、新帝国軍を統率する観念へと希釈される経緯が示される。つまり、日本は開国したが、新帝国軍や産業革命を担う経済人らの精神の中樞は武士道へと新たに「鎖国」したのである。

天皇は開国と鎖国、この二つの全く異質な方向性を交わせる交差点の役目を果たしたわけだが、その取り持ち役が米軍将校によってなされた。従って、この映画の今日的意味合いは、米軍将校が「第二のマッカーサー」として派遣されたことを示している。つまり、前任者が日本人から骨抜きにし否定し去った武士道を、新たに新世代の日本人に入れ直す役目なのだ。少なくとも、孤独な「テロ戦争」を戦うアメリカ側は、それをこそ日本人に深く期待している。きみらの祖父や父は、かつてわが国に徒手空手で戦いを挑む気迫を示したではないか。それを今なぜ「テロ戦争」に活用しないのか？

この映画は米軍将校を通じて、戦後の日本人に武士道をもう一度《入れ直す役目》を帯びており、《孤独な「テロ戦争」を戦うアメリカ側は、それをこそ日本人に深く期待している》ということなのだ。越智道雄によれば、映画『ラスト サムライ』はそんなアメリカのイデオロギーが込められているということになる。ではどうして、彼はそんな露骨なアメリカ映画に試写後《一週間、各場面の映像が繰り返し蘇り続け、しかもその度に涙がこみあげてきた》りしたのか。その理由をこう説明する。

《しかし、この映画の皮肉は、「テロ戦争」の片方が頻発させる「玉砕」、つまり「自爆テロ」の原型をも示していることだ。アメリカ側は、いや違う、「自爆テロ」は卑怯未練な手口で、武士道の風土にも置けないやり方だと言うだろう。しかし二位から十五位

までの14カ国の武力（ギャトリング・ガンから核兵器まで）に対抗するには、自爆テロ（爆薬搭載のトラックは刀槍と騎馬に相当）はほとんど土族反乱に近い絶望的な戦闘方法ではある。」

映画はまずその中身に即して分析し解釈するなかで、現在への問いかけにつながってくるというようにではなく、まず現在の情勢のなかに映画を投げ入れた上で、映画を読み解く手法がそこでは用いられている。だから、《お雇外人は、日本が西欧が100年かかった産業革命を30年でしてのける上で不可欠な存在だったが、イラクへの派兵に日本が逡巡する昨今、この映画のような主人公、つまりお雇外人の立場を投げ打って、武士道に殉じる時代錯誤の反乱土族に味方するアメリカ人将校が登場したのは、象徴的だ》が、《にもかかわらず、「玉碎」は太平洋戦争、そしてイスラム過激派によるゲリラ戦争で、未だに「衆寡敵せず」の劣勢を乗り越える手段として繰り返されている。「神風」は日本では否定されているが、イスラム圏では「ラスト サムライ」に涙した私のように感動をもって受け入れられているのだろう》という理解がかたちづくられる。

裏目読みもはなはだしいが、私にはもっと単純にこの映画は、近代化を急いだ日本人にとってだけでなく、人間にとっての大事なスピリッツを失くしていった日本国を批判的な視線でみつめながら、その延長線上に君臨しているアメリカの今日を批判しているように映った。冒頭で引用した、《サムライたる者、非道な行いを禁ず》とか《サムライたる者、敵に対しても礼を欠かざるべし。》という文言そのものが、アフガンやイラクに限らず、あらゆる敵を殲滅することだけを至上の目的としたアメリカ批判になっているのではないか。アメリカはこれまで一度も日本に対して敬意を払ってきたことはなかったし、アメリカ映画に出てくるどのニホン人も、チビで出っ歯で近眼の、猿のような奇声を張り上げる人物としてしか典型的に描いてこなかった。しかし、この映画はアメリカ映画としては初めてまともに、歴史の中の日本人に対して敬意をもって接してくれたのであり、この一点でも根底的なアメリカ批判になっているのではないか。

いまのアメリカが自らと全く無縁な武士道を、いまの日本人に《入れ直す》ことを期待して、映画『ラスト サムライ』を送り込んだという説は笑止であり、その程度で日本や日本人が生まれ変わる筈がないのを熟知しているのも、アメリカではなかったか。更に、《武士道に殉じる時代錯誤の反乱土族に味方するアメリカ人将校》は、《形の上では同国人ペリーの日本開国に背いて日本を再び鎖国に追いやる》役割を果たしていると解きながら、他方で武士道を「テロ戦争」に活用するために、《この映画の今日的意味合いは、米軍将校が「第二のマッカーサー」として派遣されたことを示している》と指摘するのだから、支離滅裂である。なぜなら、越智氏の説では米軍将校は《日本を再び鎖国に追いやる》ために、《「第二のマッカーサー」として派遣され》ていることになり、いまのアメリカは一国平和状態に「鎖国」しているいまの日本を、「テロ戦争」にむかって「開国」させたいと願っているとしか考えられないからだ。

越智道雄が《明治政府軍のギャトリング・ガンに刀槍だけで突撃、玉碎する騎馬の反

乱士族》の光景に、《アラビアのロレンス》で自分の部族を壊滅させたオスマン・トルコ軍への報復をロレンスに願い出て、作戦遂行の邪魔として容れられなかったベドウィン族の首長が単騎、半月刀を振りかざして突撃、敵の一斉射撃に倒れる場面が重なり続けた》というなら、《近代重火器で装備されたメキシコ軍団に、「西部男」4人を立ち向かわせ、壮絶にも見事な死に花を咲かせてみせた》、サム・ペキンパー監督の『ワイルドバンチ』を思い浮かべているのは、同じキネ旬同号の映画評論家石上三登志である。私なら差し詰め、ポール・ニューマンとロバート・レッドフォードの二人の強盗が追い詰められて、まるで未来の崖に飛び込むように不敵な笑みを浮かべながら、包囲しているメキシコ軍団の前に突っ込んで玉砕するジョージ・ロイ・ヒル監督の『明日に向かって撃て!』だろうか。

石上氏は、《なぜこれが「アメリカ映画」なのか、「日本」では作れないのか》といった根底的な問いを折角発しながら、《そこにあった「過去」の時代の、そしてそこにいた人々の生きている「空間」こそを、真の意味で「再生」しようと努力しなければ、つまりそれは『たそがれ清兵衛』がきわめてそうだったような、全スタッフの努力の結集であらねばならぬようには、今の日本の「時代劇」はそうになっていない、従って作れない》というような技術的な問題に帰着させようとする。もちろん、そうではない。《そこにあった「過去」の時代の、そしてそこにいた人々の生きている「空間」こそを、真の意味で「再生」させるのは、《全スタッフの努力の結集》ではない。そのはるか手前で、制作者（エドワード・ズウィック監督）たちにまず、《そこにあった「過去」の時代の、そしてそこにいた人々の生きている「空間」が時代を超えて、スピリッツのみであろうとも継承されていなくてはならない。つまり、その「空間」が制作者たちのなかで息づいていなければならない。《全スタッフの努力の結集》はその後にやってくるものである。

なぜ、このような映画が「日本」では作れないのか。それは、このような映画が作られる以前の、まず発想されてくるような土壌が戦後の日本には皆無であるからだ。戦後の日本社会が武士道なる精神を引きずって生きていくには、あまりにも困難で耐えがなくなっているからだとしかしいようがない。裏返して武士道の側からいえば、時代の変化のなかで生き延びていく拡がりをもちえずに、たやすく葬り去られていく脆弱さに引きずられていたからだ。石上氏は続いて、《なぜこの「時代劇」がアメリカで作られねばならなかったのか》と問うて、その「深刻」な理由をこう述べる。

《なぜならば、日本の近代化のために雇われ、次第に武士のありように共鳴してゆくオールグレンは、南北戦争後、あの対インディアン戦で有名なカスター將軍率いる、例の「第七騎兵隊」に参加したが、その「戦い」ぶりの残虐さに失望したからと、まず描かれる。

つまりこれは、あの「西部劇」に描かれたようなアメリカの「戦い」の、その発展型であるところえた「戦争」に対する拒絶反応……「かつて」も一度あった、あれである。そして、それに比べれば、日本の武士の「戦い」は素晴らしく、しかしそれをしもアメリカ的な「近代化」の名のもとに捨て去ろうとしているのが、実は日本政府だと知った

とき、彼は「サムライ」となる。(中略)

『ラスト サムライ』も、そしてかつてのこの『ワイルドバンチ』も、どちらも新しい「時代」の醜悪さこそが「戦う」相手ということで、実によく似ているアメリカ映画である。でも、『ワイルドバンチ』がアメリカ本来の「戦う」「心」をこそ謳いあげた「アメリカ映画」ならば、『ラスト サムライ』はなんと日本本来の「戦う」「心」を謳いあげた「アメリカ映画」。日本人として悪い気はしないが、でもなんだか恥かしいような、落ち着かないような気分。アメリカは一体どうしちゃったんだ……》

アンタこそ、日本人として《なんだか恥かしいような、落ち着かないような気分》に一向に踏み入っていこうとせず、眼を逸らせるなんて、《一体どうしちゃったんだ》といいたいような感想である。この映画が《アメリカで作られねばならなかった》必然性は、どこにあるか。9・11以降のアメリカが大量破壊兵器をもって弱小国に問答無用で攻撃していく、その姿のなかに醜悪さ以外のなにものをも見出せないと感じた制作者たちが、インディアン討伐の残虐さに嫌気がさした米軍将校を明治初期の日本に登場させて、自分の役割がインディアン討伐と同じ反乱土族の討伐であることを知った彼を反乱土族の側に立たせることによって、人間としての大事なスピリッツを宿していた「ラスト サムライ」を根絶やしにしていくように仕向けたアメリカ帝国主義に対する批判を描写した、というふうに図式的に読み込める。

もっとも、先の越智道雄がそうであったように、作家の島田雅彦も『サンデー毎日』の連載(04・1・18)で、《サムライ・スピリッツの逆輸入とでもいうべき「ラスト・サムライ」が話題になっているが、日本人のナルシズムをそそるストーリーの中に「テロに屈するな。死ぬ覚悟を決めて生きろ」というネオコンのメッセージが託されているようで気味が悪い》と警戒するように、この作品は両義的な意味を鮮明に孕んでいる。ワンフレーズ・ポリティックスの我が総理も年末にこの映画を観て、元旦に靖国神社を参拝したということらしいから、「テロに屈するな。死ぬ覚悟を決めて生きろ」派であったのだろう。人は自分に都合よく作品を解釈することの典型である。なぜ、両極端の評価が生じるのか。それは、サムライ・スピリッツの捉え方にかかわってくる筈だ。

サムライ・スピリッツに否定的な者は概して、それが持ちだされてくる胡散臭さを警戒して、反乱土族の玉砕シーンにばかり目が行き、「テロに屈するな。死ぬ覚悟を決めて生きろ」というメッセージをどうしても読み取ってしまう。だがこのメッセージも両義的であり、アラブの世界からすれば、この映画は逆にジハードへの鼓舞になるにちがいない。サムライ・スピリッツに肯定的な者の間でも両義性が浮かび上がっており、そのサムライ・スピリッツを「死ぬ覚悟」に重ねるなら見事な玉砕ぶりになるし、「生きる覚悟」に重ねるなら、近代化のために魂を失っていく人間の生き方への批判に連なっていく。最後の決戦での傷が癒えて天皇との対面を許されたオールグレンが、勝元の刀を天皇に恭しく差し出すと、天皇が「勝元の死にざまを語れ」と訊き、オールグレンが「彼の生きざまを語りましょう」と答える象徴的なラストシーンを『週刊朝日』連載時

評（０４．１．２３）の船橋洋一は、『勝元の死にさまの「形」を問い、その死を失われた美として昇華しようとする天皇に、オールグレンは勝元の生き方の「精神」を示すことで日本の行く末とあるべき姿を問いただした』と、的確に捉えている。

『ラスト サムライ』に描かれたサムライ精神があまりにも美化されすぎているように感じられるのは、船橋氏も『主君のため、お上のため、会社のため、自らを犠牲にする滅私奉公的な像として描かれてきた。戦後の「企業戦士」像など、その典型だ。』と記すように、「武士道残酷物語」的な側面を我々が知らないわけではないからだ。そこから、「テロに屈するな。死ぬ覚悟を決めて生きろ」というメッセージが不断に突きだされてくるのである。《しかし、「ラスト サムライ」は、それとは違うサムライ像を示している。ここには歴とした個人の^{れっき}実存的な精神と感情が躍っている。》と、彼は指摘する。

『すべての呼吸に生きる。それが武士道だ』

「どの戦争も怖かった」

勝元は、そんなせりふを口にする。

サムライは主君のために命を投げ出すが、自らの名誉のために死ぬのである。勝元の場合、主君は大君、明治天皇をおいてない。「個人の意思で運命を変えることができる」とも彼は言った。永久革命論を信じていたのだろうか。

勝元の生き方は「名誉する個人主義」(honorific individualism)と形容するにふさわしい。これは文化人類学者の池上英子が提起した概念である。サムライはこの「名誉」をバネとする能動主義的な思想と行動を持ち得たために、社会秩序を守るだけの守旧派にとどまらず、秩序を転換し、場合によっては破壊する変革派となったと言うのである。》

米コロンビア大学で《人気のある日本関連授業はグレゴリー・ブラグフェルダー教授の「サムライ」ゼミ》であり、「学生の多くは、すでにアニメでサムライ、ニンジャ、シノビ、ローニンなどを知っている。もっとも、義経や頼朝などへはさほど関心はなく、ローニン（浪人）に引かれる。それもさまざまな種類の浪人だ。ただ、彼らのサムライ像は過度に理想的で、皮相的、時にファンタジーの世界だ。しかし、それをきっかけに日本の歴史や文化に関心を持ってくれればいいと思っている」「もう一つ、サムライへの関心は、現在のような倫理、道徳が漂流する時代、そうしたコンパスへのノスタルジアかもしれない。日米ともにそれは言えるのではないか」という教授の分析を紹介しながら、船橋氏は『「名誉」という概念をめぐる葛藤』として、映画を読み解く。

《勝元がまだ参議だったとき、大村と勝元が天皇の前で激論を戦わせたことがあった。

大村は、勝元を「自国を畏にかけ続ける輩」と断罪し、自らを「国民を未来へと導く者」と胸を張る。それに対して勝元は「それは名誉のない未来だ」と反撃する。

ここでは、「未来のない過去」と「過去のない未来」がせめぎ合っている。「名誉のための死」と「名誉のない生」の戦いといってもいい。

大村は映画では明らかに悪役である。

しかし、大村には大村のせっぱ詰まった現実主義と重い責任があった。食うか食われ

るかの欧米強国との外交戦、その中で国家が生き抜くための国民皆兵による強い軍隊の創設、である。

だから、大村は「国民」を前面に押し立てることができた。明治維新は農民も「名」を手に入れることができるようにした。武士階級だけでなく国民一人ひとりの名誉という概念を導入した。それなしには国民皆兵という国家事業は成り立たない。それに対して、勝元の「名誉」は、武士階級の名誉にすぎなかった。》

「未来のない過去」と「過去のない未来」の対立、あるいは「名誉のための死」と「名誉のない生」の戦い、というように図式化してしまうなら、「過去のない未来」や「名誉のない生」が生き残るに決まっている。はたしてそんな図式が成り立っていたのだろうか。だいたい、「未来のない過去」も「過去のない未来」もありうる筈がない。なぜなら、どのような過去も未来も育むことにおいて過去たりうるし、過去と切断された未来など訪れることはありえないからだ。勝元の生き様がいまの日本人に単なる感傷や憐憫を超えて深く心に訴えてくるものがあるとすれば、勝元もまた、日本の未来を見据えていたと受けとめないわけにはいかない。船橋氏自身も、《天皇に、オールグレンは勝元の生き方の「精神」を示すことで日本の行く末とあるべき姿を問いただした》と書いていたではないか。

「名誉のための死」と「名誉のない生」の戦いという図式も、むしろ「名誉のための生」と「名誉のない死」の戦いと反転させることができる。大村が新興実業界と結託して押し進めようとする現実主義には、「名誉ある個人主義」が深く欠損しているが故に、勝元は反対したのであって、現実主義そのものに反対したわけではなかった。明治国家の支配者たちが押し進める改革事業はすべて空洞であり、「国民」にしても農民への「名」の付与にしても、かたちばかりであった。その空洞化の行き着く先が第二次大戦での敗戦ではなかったか。「刀と弓」にこだわった《勝元の思想と死は、名誉が形式主義、教条主義の権化と化した末路を物語るものではないのか。》と記ながら、舟橋氏はこう書く。

《皮肉なことに、明治国家とその後の日本官僚国家は、名誉をとことん形式主義と教条主義に塗り込めてしまった。そうした名誉も名誉ある死の形も、先の大戦の敗北とともに崩壊した。

戦後、日本は「名誉」と「名誉ある死」を、その精神と形を、どのように表現すべきか、正面から論じてこなかった。

イラクで殺害された二人の勇気ある日本人外交官の死に直面して、私たちは突如、精神の忘れ物に気づかされた。今の時代、「名誉ある個人主義」とはいかなるあり方なのだろうか、と。》

外交官の死に対して「勇気ある」という形容も適切とは思わないし、その死を悼むとしても、《私たちは突如、精神の忘れ物に気づかされた》ということもない。むしろ、先の島田雅彦が《外交官の死に対して、「彼らの死を無駄にしない」という態度を「テロリストには屈しない」という決意にすり替えてみせたように。まるで、政府が彼らを

殺したテロリストに対する復讐を代行できるかのような言い草だ。なぜ、どのように外交官が殺されたか、について納得のいく説明を外務省はしていない。》と記していたように、政府が外交官の死を自衛隊派兵の推進力として利用していったことのほうに、明治国家が選択した現実主義と折り重なるいまの日本の現実主義を読み取るべきではなかったか。勝元が体現していた思想も現実主義と触れ合っていた筈であり、明治国家の前での選択すべき現実主義は唯一ではなかった筈だ。イラクへの自衛隊派兵にしても同様に、それしか日本の選択すべき途はなかったのかどうかであり、また自衛隊派兵のあり方としても、単に米軍占領政策の補完的な位置ではなく、現地住民の生活に対する多様な協力の仕方を模索しなければ、日本の主体性と自立性は損なわれていくばかりである。

欧米列強に包囲されるなかでいくら近代化を急ぐ必要があったとしても、外からの要請に駆られた国造りと内からの要請に駆られた国造りの双方が有機的に組み合わせられないかぎり、運命を選び取っていく国家としての主体性も自立性も育成される筈がなかった。明治国家を支配した大村たちは外圧に対抗する国造りを急いで、内部からの要請に基づく国造りを無視したために、勝元たちは蹶起したにちがいがなかった。そう受けとめなければ、船橋氏がいうように、《勝元の「名誉」は、武士階級の名誉にすぎなかった》し、映画から汲み取るものもなくなってしまう。もし勝元の「名誉」が《武士階級の名誉にすぎなかった》とすれば、映画のなかのオールグレンの勝元への共感はなんだったのだろう。船橋氏はサムライ精神を勝元に限定したために、オールグレンというもう一人の「ラスト サムライ」の存在を看過することになってしまった。

勝元の生き様が武士階級の名誉にしかすぎなかったら、オールグレンは勝元にかかわる余地を見出すことができなかった筈だ。勝元のサムライ精神に「名誉ある個人主義」が見出せたからこそ、彼はインディアン討伐で疲弊した心を勝元との交わりのなかで回復することができ、自らも「ラスト サムライ」として生きることを決意したのではなかったか。オールグレンの存在は、勝元が体現していたのが日本という島国での偏狭な武士階級の名誉ではなく、西洋にも通じる「名誉ある個人主義」にほかならぬことを紛れもなく物語っていた。もっともオールグレンが勝元の生き様に「名誉ある個人主義」を見出すことになったのは、インディアン討伐に自らの「名誉ある個人主義」が満たされるどころか、ズタズタに引き裂かれてしまう傷を負っていたからだ。《インディアンの戦士たちは手斧と弓矢だけで武装して、勇敢に銃の前に突進をくりかえして全滅していった》光景と、刀と槍だけで突撃して玉砕してしまった勝元たちの戦いざまとを重ねて捉えるのは、『週刊現代』連載（04・1・17）の宗教学者の中沢新一である。

《文明は人間をいやしくしていく。文明の軍隊に所属して、誇り高い未開の戦士たちを虐殺していく立場に立たざるをえなかった自分は、いつの日か、人間としての、戦士としての、誇りをとりもどすことができるだろうか。こうして彼は、文明開化の時期の日本にやってきて、「最後のサムライ」とたちと遭遇することになったのである。

この映画が興味深いのは、サムライという存在を、徹底してインディアンの戦士と重

ね合わせて描いていることだ。そう言われてみれば、サムライの生き方や死に方の理想は、たしかにインディアンの戦士の伝統として伝えられているものと、そっくりなのである。サムライは倒した敵の首を取る。インディアンの戦士は敵の頭の皮をはぐ。どちらの風習も、人間の生命力は頭部に宿っているという考えからきている。

屈辱に耐えるぐらいなら、どちらの戦士も自殺を選ぶ。死を恐れない。自分に立ち向かってくる敵の名誉を、よく尊重する。どちらもとてもいさぎよい、一本筋の通った人々である。『ラスト サムライ』はあきらかに『ラスト・オブ・モヒカン』を意識してつくられている。インディアンの文化を滅ぼしてしまったアメリカ人の秘かなトラウマが、日本人にはなんとなく面はゆい、こんな映画をつくらせているのだろう。》

この映画は《サムライという存在を、徹底してインディアンの戦士と重ね合わせて描いている》だけではない。この時期に作られ、上映されていることを考えるなら、アメリカの無法な侵略に激しい「レジスタンス」(抵抗運動)を繰り返しているイラク(アラブ)の戦士たちとも重ね合わされている筈だ。サムライやインディアンの戦士の風習とイラクの風習とがどのように似通った面を持っているかは知らないが、《屈辱に耐えるぐらいなら、どちらの戦士も自殺を選ぶ。死を恐れない。自分に立ち向かってくる敵の名誉を、よく尊重する》というのは、アラブでも同じであろう。《インディアンの文化を滅ぼしてしまったアメリカ人の秘かなトラウマ》が、いままさにアラブの文化を滅ぼさんとする母国と、その母国に追従してばかりいる日本に対する憤りの表現として、日本にもかつて存在したサムライへの描写に駆り立てていったのではなかったか。

《でもどうして、サムライとインディアンの戦士の精神は、こうまでよく似ているのだろう。》と疑問を發して、西日本のサムライは《宮本武蔵や佐々木小次郎をみても、どうも職人芸として剣術がうまい人たちという印象が強くて、乗馬や集団戦法がたくみで、独特の主従関係の中で、いさぎよい生き方死に方を理想としていた東日本のサムライとは、どこかが違っている。》と、中沢氏は指摘する。

《それもそのはずである。東日本のサムライは狩猟文化の中から出現してきたものとして、その伝統は縄文時代にこの列島に暮らしていた人々の世界にまで、深い根を下ろしているのである。これにたいして、職人芸としての西日本の武士のほうは、大陸や半島からやってきたもっと新しい文化から生み出されている。だから、東日本で発達したサムライの文化には、どこか縄文文化の精神を感じることができるのだ。》

サムライを生むことになった縄文文化の狩猟民と、アメリカ大陸に渡ってインディアンの文化をつくった人たちとは、同じルーツをもっている。一万数千年前、バイカル湖東岸のあたりを出た人間の群れのうち、南下して日本列島に渡ってきた人々と、東に進んでアメリカ大陸に入っていた人々とは、人間の尊厳や生きることと死ぬことの意味などについて、共通の考えを持っていたらしい。とくにそれは戦士の伝統の中に、はっきりとあらわれている。こうして因果はめぐりめぐって、トム・クルーズが「最後のサムライ」の一人となって、近代軍隊の前に突撃していくことで、尊厳を深く傷つけたトラウマから、

ようやく解き放たれることができた、というお話がつくられることになったわけである。》

オールグレンがどこからやって来て、どこへ還って行ったのか、余分なことはいわずにさっさと切り上げて、サムライたちが築いた東京という都市のなかで、《野生状態の東京の姿が見えてくるようになった》自らの幻視体験へと彼の記述は向かっていく。中沢新一によってサムライとインディアン^①の戦士は、遠く《縄文文化の精神》を根底に《同じルーツをもってい》たことがわかったが、もう一つ、オールグレン大尉は南北戦争を戦った英雄という設定にもなっていた。誰も指摘していないが、インディアン討伐と同様に、この南北戦争の体験もオールグレンの日本での生き方に大きな影を落としていたことは想像に難くない。

南北戦争は1861年から65年にかけて、アメリカ合衆国が南北に分かれて戦った内戦で、北軍の勝利に終わったことは記すまでもない。18世紀後半にイギリス領植民地からの独立を勝ち取って、共和制国家を設立したアメリカは、合衆国内で政治・経済・社会的に南北の分化が進み、奴隷制の拡大をめぐる両者の対立は決定的となり、南北戦争が勃発したが、60年に奴隷制拡大に反対して大統領に当選した共和党のリンカーンが終戦5日後に暗殺されたことも、彼の奴隷解放宣言と共によく知られている。南北戦争は今日では内乱（Civil War）と呼ばれているが、戦争中は連邦側（北軍）が反逆戦争（War of the Rebellion）連邦を脱退した11州の南部連合側（南軍）は独立戦争（War of Independence）と呼んでいたのである。表面上は奴隷制を否定する北軍のほうが奴隷制を維持し続ける南軍に較べて、人道的であるようにみえるけれども、商工業中心の北部は経済的に奴隷制度を必要としなくなったが、綿花栽培を中心とする農業地域の南部では奴隷制度を必要としていたという側面を見落としてはならない。

南北戦争はアメリカ建国以来今日までにアメリカ人が経験した最大の戦争であり、5年間のこの戦争で死んだ将兵は南北合計で62万3千人に達し、独立戦争から第二次大戦に至るアメリカの他の戦争の戦死者の合計よりも多く、第二次大戦の戦死者が41万人を割っていたことを考えると、その犠牲は巨大だったといえる。それは南北戦争が人類史上初めての近代的総合戦で、南北とも大軍を必要とし、徴兵制によって市民を動員したからである。軍用電信、潜水艦、地雷、要塞用鉄条網、機関銃その他の近代兵器の使用や鉄道輸送による大軍の展開、補給線の確保等は従来の戦争の様相を一変させたが、他方で18世紀的な旧態依然たる密集陣形の戦術を両軍が取っていたために、そこへの砲火の集中が多大な損害を生み出した。

戦争はほとんど北軍の南部侵攻の形をとって行われ、兄弟殺しの様相を呈していたことが、オールグレンがお雇い外人としてやってきた日本で小規模に再現されていたのだ。北軍の勝利によって農産物輸出による経済発展のコースを辿ろうとしていた南部経済は抑制され、工業化による経済発展が主流となってアメリカが工業国として世界経済の中心たりえたように、日本も勝元たち反乱士族を征圧し、世界の中心に向かって近代国家を形成していったのである。

2004年2月3日記